ミャンマー民主化運動伴走記　2023年版 ⑤

ミャンマーを忘れていないか

中央大学教授　目加田説子（めかたもとこ）

2023 年 3 月 12 日
東京新聞

２月３日朝、ミャンマー国軍がある村を襲った。百三十軒以上の家屋に火を放ち、村民の頭を叩いて殺害した。６日にはジャングルの中に避難していた別の村の人々に、約百人の軍人が重火器を発砲した。

ミャンマーの人権団体によると、２０２１年２月１日の軍事クーデターから今年３月７日現在までに、確認されただけでも平和活動家、ジャーナリスト、一般市民等を含む３１１１人が殺害され、２０３４２人が逮捕、１６３８０人が身柄を拘束されている。

クーデター当日、国軍は与党の国民民主連盟（ＮＬＤ）のアウンサンスーチー国家顧問やウィンミン大統領、ＮＬＤのメンバーらの身柄を拘束した。３月から、ＮＬＤ政権が二期目を迎えるはずだった。国軍は、ＮＬＤが勝利した前年の選挙に不正があったとの名目で、民主的に選出された政府を転覆させたのである。

＊

空爆を含む激しい戦闘等により、１３０万人近い人々が隣国に逃れたほか、１３５万人が居住地を追われて国内避難民（ＩＤＰ）として逃れている。国連人道問題調整事務所によれば、総人口の３分の１にあたる１７６０万人が緊急支援を必要としている。

筆者が携わっているＮＧＯが支援する現場では、空爆を逃れて山間地に身を隠す人たちが食糧や教育、医療を受けられない厳しい現状が続いている。多くの国連機関や国際ＮＧＯが撤退する中、若い医師や看護師、教師たちが、臨時診療所や仮設病院を拠点に、片道２時間の山道を徒歩で米や油、ミルク、タープや古着等の物資を届けている。爆弾や地雷で傷ついた人びとを治療し、救命措置や止血法等の訓練を実施し、学校に通えなくなった子供たちに読み書きを教えているのである。

こうした活動の中心を担っているのは、クーデター後「市民の不服従運動（ＣＤＭ）」に参加して来た人たちだ。コロナ感染拡大で既に逼迫していた医療現場は、非常事態宣言によりＰＣＲ検査が滞り、軍政に抗議する人が治療を阻止される等、更なる混乱に陥った。

医療現場を去った医師や看護師、医学生等が始めたＣＤＭは、良心にもとづいて特定の法律や権力の命令に非暴力で抵抗し、学校教員や銀行員、鉄道職員、消防団員、公務員等を巻き込みながら瞬く間に全国に拡大した。

デモやストライキといった非暴力運動で民主化を訴えているが、国軍は武器を含むあらゆる手段で市民の弾圧を続けている。

＊

ミャンマーと歴史的にもつながりの深い日本は、市民弾圧の当事者であるミャンマー国軍の軍人を防衛省が受け入れ、クーデター後も教育訓練を実施していることが明らかになっている。先月には、麻生太郎前財務相と日本ミャンマー協会の会長である渡辺秀央元郵政相がミャンマー国軍から名誉称号と勲章を贈られた。日本ミャンマー協会は、現地に進出する日本企業が加盟する民間団体で、渡辺氏はクーデター後もミャンマー国軍を擁護してきたことで知られる。

日本にミャンマー国軍との強いパイプがあるならば、すべきことは一つだ。市民弾圧を直ちに止めさせること。ウクライナ紛争の陰にミャンマーを埋もれさせてはいけない。

2023 年 02 月 24 日　日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（16）

「あなたの自由を私たちの自由のために使って！」

西方　浩実

「あなた方のフィードから、ミャンマーはゆっくりと消えていきます。インターネットの完全遮断は時間の問題でしょう・・・。どうか、ミャンマーのために声を上げることを、やめないでください」（注１）４月３日、1 日８時間のインターネット遮断が始まって、約 50 日。モバイルインターネットが使えなくなって、約 20 日。もう十分に不便なのだけれど、昨日からさらに、一部の Wi-fi が遮断された。

▽奪われていく情報の自由

ミャンマー人の同僚は「先週やっとの思いでポータブル Wi-fi を手に入れたのに、むだになってしまった」と肩を落とした。彼女の自宅には Wi-fi がなく、モバイルインターネットが遮断された時点で、いわゆるネット難民になっていた。そこで Wi-fi を導入しようとしたのだが、取り付け工事はすでに数ヶ月待ち。最終的にポータブル Wi-fi に頼ることにしたのだった。それもヤンゴンでは入手できず、地方にいる親戚を通じて、普段の２倍の金額で購入したという。

職場でこの話を聞いた私も、自宅の通信状態が気が気ではなかった。Wi-fi が遮断されてしまえば、情報にアクセスする手段はなくなってしまう。新聞もテレビも、もはや軍に都合の良いことしか伝えないプロパガンダになり下がり、まともな報道は今やインターネットでしか見られないのに。何の情報もなければ、家の外に出るのもこわい。街が今どんな状態なのか、今日は近所で武力弾圧が行われていないか、どうやって知ればいいのだろう・・・。

同僚たちに、自宅でインターネットを使えない人たちはどうやって情報を得ているの？と聞くと、口々にこんな答えが返ってきた。「電話で連絡し合っているんだよ。たとえば僕の家には Wi-fi があるから、毎晩ネットがない友達がみんな電話してくるんだ。毎晩、今日はどんなことがあったか、まとめてシェアしているよ」

「遮断される前に、Facebook で呼びかけている人もいるよ。『自分の Wi-fi は遮断されない型のものだから、情報がほしい人は今のうちにコメント欄に電話番号を書いて。毎晩ショートメッセージで情報を送るよ』って」。こういう、表面上は見えない助け合いが、抵抗を続ける市民を支える「草の根」となり、地中でネットワークを形成している。

かつての軍政を知らない私は、クーデターが起きて以来、周囲のミャンマー人たちに「軍政のとき、何が一番いやだった？」と質問してきた。答えは、だいたい３つくらいに絞られるが、中でも多いのは「情報統制」だ。

「テレビも新聞も、フェイクニュースしかなかった」「僕たちは 21 世紀になっても、白黒テレビで国軍放送を見ていたんだ」「10 年前に民主化するまで、インターネットなんて目にしたこともなかった。携帯の SIM カードさえ、1 枚 1000 ドル（約 11 万円）以上したんだよ」

そういえば日本人のミャンマー研究者も、あるセミナーでこう話していた。「かつて軍政期のミャンマーでは、インターネットを引くのに（情報省の）大臣にまで書類を提出しなければいけなかった。それでも許可がおりるまで１年かかった」

中でも、30 代の友人が話してくれたことが、私にとっては最も衝撃的だった。「軍政下で唯一信じられる情報は、海外のラジオ番組だった。大学生の頃、僕らはこっそりラジオで VOA Burmese（注２）の電波を拾って、なんとか世界を知ろうとしていたんだ」。自分と同年代の彼が、そんな青春時代を送っていたなんて・・・。

ミャンマーで「インターネットが遮断される」というのはこういう意味なのだ。

ちなみに私の場合、自宅のインターネットは生きていた。はぁ、よかった、と胸をなでおろす。だけど、明日はわからない。いつか、それも近い将来に、すべてが遮断されて何もわからなくなるかもしれない。ミャンマーの人々の声も、もう国外に届かなくなってしまうかもしれない。

そのときはミャンマーの 5400 万人に代わって、世界中の一人ひとりが声をあげてほしいと、切実に願う。アウンサンスーチー氏は、かつての軍政下で世界の人々にこんな風に呼びかけた。

「あなた方の持っている自由を、持たない人のために用いてください」

▽機能不全に陥った街

４月 10 日、今日もカラッと晴れ上がった青空のヤンゴン。ミャンマー正月（4 月中旬）の訪れを告げるパダウの花が、地面に黄色い絨毯をつくる。その鮮やかな色に、自然と足が止まる。この美しい国が今、激動の最中にあるなんて、誰が信じるだろう。たった１ヶ月半で、何の罪もない人が 600 人以上も殺されたなんて、どうして信じられるだろう。

最近、シュプレヒコールや銃声を、めったに聞かなくなった。赤い旗も、アウンサンスーチー氏の T シャツも、ほとんど見かけない。目立ったことをして警察や兵士に目をつけられたら、家に踏み込まれ、暴力を振るわれたり金品を強奪されたりするからだ。そりゃ、口をつぐむのも仕方ないよな、と思う。

穏やかな街にわずかに残る混乱の跡は「Join CDM」や「Respect our vote」という壁の落書き。以前はバリケードの一部だった、道端の土嚢袋。そして、2 月 2 日から途切れずに続く、夜８時の鍋の音。

それでも「非日常」は、街のいたるところにある。たとえば早朝６時から、道端に行列をつくる人々。目的は ATM だ。銀行が動かなくなって２ヶ月、いよいよ手元の現金が足りなくなったのだろう。それにしても朝 6 時とは・・・、と驚いていたのだが、同僚の説明を聞いて納得した。「預金残高がどれだけあっても、ATM の中のお札がなくなれば引き出せないでしょ。だから、まだ機械が動いていない早朝から並ばないといけないの」。

さらに、一度に引き出せる上限額がどんどん変わってきている。2 月は、1 日 1 人あたり約 8 万円まで引き出せた。それが 3 月には約 4 万円になり、先週ついに 1 万５千円になった。銀行のレートと街の両替所レートには、先週から、1 ドルあたり 60～80 チャット（４～6 円）くらいの差が出始めた。ミャンマーチャットがふたたび紙くずになるのではないか、という嫌な予感がくすぶる。

ヤンゴン生活の悩みのタネだった渋滞は、うそみたいに消えた。特に夜７時を過ぎると、大通りは不気味なほど静まり返る。喧騒と排気ガスに満ちていたにぎやかな街が、今はまるでゴーストタウンだ。モバイルインターネットが遮断されていて Grab（配車サービス）が使えないので、道端でタクシーを拾おうとするが、なかなかタクシーが通らない。こんなことは今までなかった。

仕方なく職場からポツンと歩いて帰宅していると、だれもいない大通りを、車が猛烈な勢いで走り抜けていく。夜８時からは戒厳令だ、さぁ急いで。

多くの公立病院も、機能を止めたままだ。州立や県立の大きな病院では、医療者の大半がストライキに入ったため、軍の占領下に置かれ、軍医が派遣されている。とはいえ、医療者の絶対数も足りず、病院はほんの一部しか機能していないという。だが、国営新聞には連日しつこいほどに、病院での診察シーンが、カラー写真付きで掲載される。我々はちゃんとやっていますよ、患者もこんなに感謝していますよ、と言わんばかりに。

私には、心疾患をもつ友人がいる。クーデター後のストレスのせいか、彼女は３月に一度、狭心症の発作を起こした。心臓の痛みに怯えながらも、彼女は軍が占領する公立病院ではなく、私立病院を選んだ。数日後、退院した彼女はこう言って嘆いた。「マンダレーの大きな公立病院に行けば、治療ができる機械がある、と言われたの。でも今は、その病院も軍に占領されている。だから治療が受けられない」。

軍医ならいるんじゃない？軍医の治療を受けるのは嫌なの？レベルが低いの？

そう聞くと、彼女はこう答えた。「レベルは知らない。でも軍人たちにとって、私たちみたいな一般市民の命は軽いんだよ。少なくとも私は、彼らが一生懸命治療してくれるとは思えない。・・・あなたは、信用できない人に命を預けられる？」・・・そうか、そうだよね、と思う。この国の大多数は、軍をまったく信用していないのだ。

返す言葉に詰まった私は、別の質問をする。「もし医療者が CDM をしなければ、治療を受けられたわけでしょ。医療者は CDM をやめて、病院に戻ってきてほしいと思う？」

彼女は迷いなく答える。「そうは思わない。確か

に私には、治療が必要だよ。だけど、そういう人は限られているでしょ。一方で、CDM はすべてのミャンマー人にとって重要なの。だから CDM は続けなきゃいけない。CDM は、私たちの希望なんだよ」

ミャンマーの市民生活は、機能不全に陥っている。だけどこれは、人々が闘い続けている証でもあるんだと思う。膨大な数の人々が、かつて約束されていた自由な未来をとりもどすために、不便や理不尽をみずから引き受けている。この不屈の信念は、決して消えることのない希望は、どうしたら実を結ぶのだろうか。

＜注＞

１・4 月 2 日 NIKKEI ASIA 記事

https://asia.nikkei.com/Spotlight/Myanmar-Crisis/Myanmar-shutdown-of-wireless-internet-fuels-fears-of-news-blackout より和訳

２・ タイに拠点を置く、国際放送局 Voice of America のビルマ局。1988 年の民主化運動で国外に逃れた政治難民などが記者として活躍している。

2023 年 02 月 28 日　日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（17）

チラシ一枚で若者が捕まる国

西方　浩実

「さっき仲間が捕まってしまった・・・。以前あなたに紹介したあの子も、捕まりました」。4 月 14 日、ヤンゴンに住む友人からの電話に、思わず息を飲む。軍の目をかいくぐって、抗議活動を続けてきた女子大生たち。主要なメンバーは自宅を離れ、身を隠しながら活動を続けていた。捕まらないように、警戒していたはずだった。

▽閑散とした「水かけ祭り」

「〇〇通りで軍が検問を始めたんです。それで所持品を検査されて、引っかかってしまった」。何を持っていたの？と聞く。「チラシです」。あぁ、と思わずため息が出る。チラシか・・・。

それはモバイルインターネットが遮断されたミャンマーで、人々の連帯や行動をよびかける、ほとんど唯一の手段だった。若者たちがチラシを配って呼びかけていたのは、非暴力の抗議。夜空をスマホの光で彩る、ハンドライト・ストライキ。道路や壁に赤いペンキをまく、レッドキャンペーン。デモ隊が弾圧され、何百人もの人が殺されてもなお、若者たちは軍政に対し、そうした小さく平和なレジスタンスを地道に続けてきたのだった。

誰も傷つけない意思表示。それでも、捕まってしまう。チラシが見つかってしまったとき、どれほど怖い思いをしただろう。護送車に乗せられるとき、痛い目にあわなかっただろうか。今頃、泣いていないだろうか。無事に出てきてほしい。拷問もレイプも、絶対にされてほしくない。心配で、くやしくて、胸が詰まる。

それでも彼らの仲間やミャンマー市民が、抗議をやめることはないだろう。国軍が罪のない人を傷つければ傷つけるだけ、反軍政の意思は、その根を深くしていく。チラシ一枚でつかまるような国で、いったい誰が希望を胸に生きられるだろう。

昨日から１週間の水祭り休暇に入ったミャンマー。普段ならそこらじゅうの通り沿いにステージが建てられ、大音量で音楽が鳴り響き、歩いているとバケツやホースで水をかけられて全身ビショビショになる季節。一年の嫌なことを水で洗い流し、澄んだ気持ちで新年を迎えようというミャンマー最大のお祭りだ。

今年は、軍が水かけ祭りの開催を宣言したものの、街は閑散としている。「軍は、いつも通りに水かけ祭りをやって、何事もなくうまくいっているように見せかけたいんだよ。その手にはのるもんか」と、息巻く友人。

一方、いつも陽気な同僚は「今年はみんな 2 月に（軍の放水車で）水をかけられたからね。水かけ祭りはもう終わったよ！」と、渾身の（？）冗談で笑わせてくれた。新しい１年は、きっと希望で溢れま

すように。ぎらつく太陽の下、人通りの少なくなった街で、こっそりと祈る。

▽お願い、無事でいて

４月 21 日、取り返しのつかないことをした。

数日前、知らない番号から着信がきた。誰だろう、と思いながら通話ボタンを押すと、先日会ったばかりのミャンマー人の友人の声が聞こえてきた。開口一番、彼は言った。「数日間、かくまってもらえそうな場所はありませんか」。取り乱している様子はなかったが、どういう状況なのかはすぐにわかった。軍に追われているのだ。

「ホテルだとだめなんです。宿泊者リストに載ってしまうので」。確かにその通りだ。ホテル側は、警察や軍が入ってきたら拒めない。そしたら・・・私の自宅か。ここに、数日間かくまえるだろうか。起き抜けの、回らない頭で考える。

えぇと、異性同士だから、一つ屋根の下で何日も過ごすわけにはいかないな。いやそれは私がホテルに泊まればいいか。・・・でも、待てよ、そういえばこの家は勤務先で契約している社宅だ。彼を追って警官や兵士が押し入ってきたら、職場がマズイことになるだろう。それは避けなければ・・・。

その人をかくまうことが何を引き起こすのか、とっさに判断できず、うーん、うーん、と唸るばかりの私に、その人はまるで助け舟を出すように「むずかしいですよね」と言った。「ちょっと友達と相談させて。すぐにかけ直すから」。そう言って、一旦電話を切る。

それから信頼できる友人に電話をかけて、ああでもない、こうでもないと頭をひねり、ひとまず１週間の潜伏プランを立てて電話をかけ直す。・・・が、出ない。滞在場所を確保したから電話をください、とメッセージを送り、そわそわと連絡を待つ。

折り返しの電話は、こなかった。メッセージの既読もつかない。こういうときは、こちらからむやみに電話せず、待った方が良い。わかってる。わかっているけど。なんで出ないの。どこにいるの。

もう潜伏先を見つけて移動中なのかもしれない。それか、急いでスマホを替えて、私の番号がわからなくなったのかも。ポジティブなシナリオをぐるぐると何度も思い描く。思い描いた数だけ、その輪郭が濃くなって、現実になってくれたらいいのに・・・。

翌日も、その翌日も、電話はつながらなかった。彼の情報を探して、SNS を徘徊する。どうしてあの時「とにかく今すぐうちにおいで」と言えなかったんだろう。「その人をかくまうとどうなるか」なんてどうでもよくて「かくまわなかったらどうなるか」を真っ先に考えなきゃいけなかった。軍が罪のない人に何をしてきたか、見てきたはずなのに。

数日前にその人に会った時に、私は「困ったことがあったらいつでも連絡してね」と確かに言ったのだ。それを覚えていて、頼ってくれたのだろう。それなのに、私はその約束を果たさなかった。自分の薄情さに腹が立って、恥ずかしくて、泣けてくる。もう一度電話をくれたら、今度こそ絶対に「すぐうちに来て」と即答するのに。そんな後悔をしても、もう遅い。毎晩のように、入ったこともない刑務所の夢を見る。

日曜日には、ジャーナリストの北角さんが捕まった（注１）。ショックだった。前回のような「拘束してみたら日本人だった」という行き当たりばったりの拘束（注２）ではなく、北角さんを狙った、恣意的な逮捕だ。

北角さん逮捕のニュースを知ったミャンマー人の友達が、私に電話をかけてくる。「軍は、北角さんが『偽の情報を広げた』と言っている。ということはつまり、彼は真実を伝えたんだ。自分の国のことじゃないのに、感謝している」。

私の知る限り、北角さんは日本語で記事を書き、日本語で発信していた。外国人でもマイナー言語でも容赦しないぞ。そう言いたいのだろうか。北角さんは、きっとすべて覚悟して報道を続けてきたと思う。だけど、だからって納得できるはずはない。彼はただ、目の前で起きていることを、映像や言葉で伝えてきただけだ。それの何がいけないの。伝えられたくないようなことをしているのは軍なのに。悔しくて泣きそうだ。

2 月、軍によるジャーナリストの拘束や民間メディアへの弾圧が始まった時、北角さんのもとで働くミャンマー人記者は、こんな風に語っていた。「メディア関係者にとって、この状況は怖い。軍政下では、法律や政府は僕たちのことを守ってくれない。でも、どんな状況においても、人々には『知る権利』

がある。情報はみんなの価値で、知ることはみんなの権利なんです」

＜注＞
１・ヤンゴンを拠点にフリージャーナリストとして活動していた北角裕樹氏。クーデター後は動画や記事、オンラインセミナーなどで精力的に現地の様子を伝えていた。2021 年 4 月 18 日、軍情報局により「虚偽のニュースを広めた」として拘束。収監されたインセイン刑務所では、事実無根の容疑（知人にビデオの購入費として支払った 2000 ドルが抗議活動の資金となった）を認めるよう迫られたという。約１ヶ月後の 5 月 14 日に釈放され、帰国。
２・北角氏は 2021 年 2 月 26 日にも、抗議デモを取材中に一時拘束されたが、その日のうちに解放された。拘束された際には一方的に警棒で殴るなどの暴行があったという。

2023 年 03 月 04 日　日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（18）

CDMから武装組織へ合流する若者も

西方　浩実

「ミャンマーは内戦状態なの？」と聞かれることがある。私がヤンゴンで見ている答えは、NO だ。内戦どころか、銃声さえ聞かない。戦車も見ない。抑圧下で静かに暮らしている。ただ、街から軍の姿が消えることはない。

▽女子大生への性的暴力に抗議デモ

数日前にショッピングセンターに行った時、ふと窓の外を見ると、高架下に警察車両が数台並んでいた。うわ、検問かな・・・帰りはあの道は通らないようにしよう。そう思って買い物を済ませた１時間後、そこにはもう軍の姿はなかった。移動しながら、市民生活を監視してまわっているのだろう。なんとなく感じる、じめっとした不気味さ。

市内には何ヶ所か、軍のバリケードによって通行止めになっている道がある。当然バリケードの向こうでは兵士がうろうろしている。別に危害を加えられるわけではないのだが、条件反射で身構えてしまう。場所によっては「ちょっと通して」と頼めば、端っこを通らせてくれたりするらしいが、個人的には、とてもそんな気にならない。ぐるりと回り道して歩く。

数日前、たまたま通りすがった道すがら、山のように土嚢袋を積み上げた厳重なバリケードを見かけた。夕暮れの薄暗い空気の中、土嚢袋の向こうには、大勢の兵士がうようよしている。すでに、一見何事もなくなったような街の中で、１カ所だけ「えっ、何ここ」と思うような異様な空気。

びっくりして一瞬足を止めそうになると、監視役の兵士がヌッと立ち上がる。いかんいかん。興味を失ったふりをして、その場を立ち去る。あとから聞いた話では、何者かがここに先週、爆弾での攻撃を仕掛けたのだという。今さらバリケードを張っても、、、と思うが、攻撃を受けた以上、何も対策しないわけにもいかないのだろう。

そんなヤンゴンに今日４月２６日、なんとデモ隊が戻ってきた。仕事中、ミャンマー人の同僚が声をひそめて「今日からまたデモが始まるよ」と教えてくれた。「え、危なくないの？」とアホみたいな質問をすると「危ないに決まってるじゃない！だからゲリラ的にやるの」とのこと。

なるほど、24 日開催の ASEAN（東南アジア諸国連合）首脳会談（注１）に関する抗議デモか、と思いきや、彼女によると別の事情があるらしい。「この間逮捕された女子大生が、取調室で性的暴力を受けたの。昨日、家族が彼女に面会したときに、取調室で女性器を蹴られた、と証言したんだって。ミャンマーでは過去にも、民主化運動のたびに軍による女性のレイプが起きている。だから、そういう野蛮な行為はもう許さない、という抗議の意を示すのよ」

帰宅して SNS を開くと、そこには確かにデモをする若者たちの姿があった。同僚のいうとおり、たっ

た数分のゲリラ的な抗議デモだ。通行人のふりをして集まり、デモをするときだけ路上で横断幕を広げ、数分間シュプレヒコールをすると、急いで撤収する。街中に散在する兵士たちが、騒ぎを聞きつけて駆けつけてくる前に。

以前に比べたら、決して大きなデモではない。でも、自由を、人権を、決してあきらめない。命がけで闘う、優しい人たち。どうかその命が守られますように、と祈る。

▽正月に防空壕を掘る

４月２６日、カレン州に住む友達から「家の庭に防空壕を掘った」と聞いた。まさか「お正月休み、何してた？」という世間話の返事に、こんな前時代的な答えが返ってくるとは思わなかったので、とっさに返事ができず、まごつく。近所もみんな掘ったというから、彼の家だけが大袈裟なわけではないのだろう。

確かにカレン州では、３月 27 日（国軍記念日）に空爆が始まって以降、数万人の避難民が出ていると報道されていた。SNS には、のどかな田舎の村が戦闘機からの空襲を受ける映像。突如ボカンと火の手があがった家から、身一つで飛び出し、走って逃げる村人たち。戦争映画のワンシーンのような映像に、これは本当にこの 2021 年に撮られた映像なのだろうかと、思わず疑ってしまう。

カレン州の友人のことも心配で「そっちは大丈夫？」とたびたび電話をしていたのだが、そのたびに「うちの村は大丈夫だよ！」と明るく返されるので、いまいち深刻度がつかめなかった。今日も「防空壕を掘るなんて、どんなに怖い思いをしていたのだろう」と思いきや、「これでもういつ攻撃されても大丈夫だ」と笑う。

どうしてそんなに平然としていられるの？と聞くと「僕たちはカレン族だ。こういうのに慣れているんだよ」と言う。どこか自慢げにすら聞こえる彼の言葉に、思わず天を仰ぐ。「慣れている」。そう言えてしまうような事実が、確かにミャンマーにはある。

ミャンマーの少数民族地域では、独立以来、実に 70 年以上ずっと軍と武装組織との武力衝突が続いてきた。クーデターが起きる前から、世界で一番長い内戦を戦っている国なのだという。今回のクーデター後も、翌日にはすでにカレン族やシャン族をはじめとする複数の少数民族の武装組織が、軍事クーデターに反対する姿勢を明らかにしていた。（注２）

実は 3 月末頃から、都市部でデモをしていた若者たち、いわゆる Z 世代の中から、そうした少数民族の武装組織に合流し、軍事訓練を受ける人が出てきていた。軍事訓練を受けているといっても、彼らには今のところ「首都を急襲してミンアウンフライン（国軍総司令官）を暗殺」などという具体的な計画があるわけではなさそうだ。ただ、非暴力で自由を叫び続けても凄惨に殺され続け、国際社会は口先で軍を批判するだけで具体的なアクションを起こしてくれない。そのうち人々が諦めてしまえば軍事独裁が定着し、未来を失ってしまう。その焦りが、若者を山岳地帯に向かわせ、武器を手に取らせている。

実はこの連載（１５）に登場した大学生も、ヤンゴンを離れ、武装勢力に合流した。CDM（市民不服従運動）の力を信じ、最後までヤンゴンで抗議し続けていた青年だ。CDM や抗議活動では事態を打開できないと、希望を失ってしまったのだという。小柄で優しそうで、とても人に銃口を向けることなどできなさそうなのに、本当に引き金を引き、人を殺すのだろうか。

この先もし本当に武装蜂起をして軍の兵士を殺したら、彼らは加害者になる。だけど、彼らは本来加害者になるべきではなく、ひたすら一方的な軍の被害者であったことを、そしてこのクソみたいなミャンマー軍にはっきり NO を突きつけられない国際社会の犠牲者であったことを、少なくとも私は覚えていようと思った。

軍事クーデターが奪ったのは、政権だけではない。民主主義を、自由を、若者の将来をごっそりと奪い、ミャンマーの未来を傷つけ続けている。

＜注＞

１・インドネシアで開催される ASEAN 首脳会談に、ミンアウンフライン国軍総司令官が出席することになり、国内では「ASEAN はクーデター政権をミャンマーの正式な代表と認めるのか」という怒りの声が上がっていた。

２・例えば、ミャンマーでもっとも歴史の古い反政

府武装組織であるカレン民族同盟も「クーデターは民主化の道のりを妨げ、国の未来に深刻な影響を及ぼす」と軍政を批判。武力で国軍を攻撃することはなかったが、軍への抗議デモを行うカレン族の住民らが弾圧されないよう警備にあたるなど、民主派と協力体制を築いていた。

2023 年 03 月 08 日　日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（19）

国民防衛隊が誕生

西方　浩実

５月１９日。ミャンマーでは最近「PDF」がもっぱらの話題だ。PDF 文書、ではない。People's Defense Force、国民防衛隊だ。４月に樹立された民主派の亡命政府「国民統一政府」（National Unity Government：NUG）（注１）が、5 月 5 日に創設を宣言した人民軍で、いずれ今のミャンマー国軍にとって代わるという。（当然、軍からは速攻で、テロリストめ！と糾弾されている。）

▽「国連や外国の助けは期待できない」

PDF が創設されると知った当初、私は、既存の少数民族武装勢力を NUG の軍として組織するのだろうと考え、まだしばらく時間がかかるな、と思っていた。ところが、予想外にミャンマー各地で「PDF」の名を冠した組織が、ボコボコ誕生し始めた。どうやら NUG のアナウンスに呼応する形で、市民たちが自発的に防衛隊を立ち上げているようだ。

ヤンゴンでもすでにいくつかの地区で、防衛隊が立ち上がった。姿形は見えないが（もし姿を見せたら軍に攻撃されてしまう）、設立を宣言する文書が Facebook で出回るので、あぁ、あの地域にもできたんだな、とわかる。

ミャンマー人の同僚に、どういう組織なの？と聞いてみると、彼女は首をかしげた。「誰が参加しているか、何人規模なのか、そういう情報は何もわからないの。Generation Z かどうかって？うーん、それもわからないなぁ。私たちも、設立の文書を Facebook で見て、初めて知るんだから」

以前書いた通り、すでに 3 月末頃から、非暴力での抗議に限界を感じ始めた若者たちが、国境エリアにいる少数民族武装勢力に合流して訓練を受け始めていた。おそらく彼らが訓練を終えて地元に戻り、PDF を立ち上げているんじゃないか。そうだとすれば、数週間のトレーニングを受けただけの即席チームだ。もし本当に軍と戦火を交えるなんてことになったら・・・大丈夫だろうか。

とはいえ、実際に PDF が軍政との戦いにおいてどんな役割を果たすのかはよくわからない。自発的 PDF はヤンゴンにもどんどん立ち上がっているものの、実際に軍との戦闘が始まったわけではなく、とりあえず組織ができた、というだけだ。いったい彼らは何をしようとしているんだろう？

同僚が仕事の手を止めて、説明してくれる。「今は、NUG のアナウンスを待っているんだよ。来るべき時がきたら、みんな一斉に立ち上がろうというわけ」。立ち上がるって、軍に攻撃をしかけるってこと？「うーん、具体的にはわからない。でも、NUG の防衛省が昨日アナウンスを出したの。来たるべき時に備えて、軍事訓練を受けるように。そのうち作戦を伝えるから、それに従って行動してください、って。」

内戦になる可能性はあるのかな。さすがにヤンゴンを空爆したりはしないだろうけど・・・。私の疑問に、彼女は真剣な顔でこう返した。「わからないよ、ヤンゴンだって。ミンアウンフライン（国軍総司令官）はどんなことでもすると言ってる。もちろん誰だって戦争したいなんて思ってないよ。だからクーデター直後からずっと、国連や外国に、助けを求めてきた。でも、それは起こり得ないことだとわかったの。もう、自分たちでどうにかするしかないんだよ」

そういえば、別の友人も同じことを言っていた。水面下で抗議活動を続ける彼に、あなたが心配だ、と伝えたとき。「ありがとう。でもこれは、僕らが

自分たちでどうにかするしかないんだ」と。思い起こせばその友人は、クーデター直後「国連の介入に期待している」と語っていたのだ。だがその期待は、これまでのところ裏切られ続けている。

世間一般的にはみんな、PDF を歓迎しているの？それとも、内戦を怖がってるの？なおも質問を続けると、同僚は笑って答えてくれた。

「もちろん、大歓迎！大部分の市民は、来たるべき決戦のときを待ってる。市民だけじゃないよ。軍の内部にもそういう人はいるはずなの。軍から脱走した CDM（市民不服従運動）の兵士たちはみんな、軍の中には同じ気持ちの兵士がたくさんいるって言ってる。だって、知ってる？CDM に参加した公務員の中には、軍人の家に匿ってもらっている人もいるんだよ。灯台下暗しで、いちばん安全だからね。軍人だって、何が正しくて正しくないか、もう気がついてる。PDF が反撃を始めた時、きっと市民側に立って戦おうとする兵士がいると思う」

諦めてないんだね、というと、みんな諦めないよ、と、彼女はまた笑った。安心したような、心配が増えたような、複雑な気持ち。

ミャンマーの未来は、ミャンマーの人がつくる。何もできない部外者の私は、圧政と不条理に苦しんできた彼らが見出す希望を、せめて、一緒に大事にしていこう。

がんばれ、がんばれ。

▽きな臭くなるヤンゴン

５月３１日。先週また少し、ヤンゴンの様子が変わった。交番や軍の施設などに、土嚢袋が積み上げられるようになったのだ。車両通行止めのバリケードも、心もち増えた気がする。つまり、市民からの攻撃に対する軍側の警戒レベルが上がっている。

最近は、毎日のように市内のどこかで爆弾が爆発し、銃撃が起きている。たとえば、区役所や、学校や、ショッピングモールの駐車場で。あるいは、兵士が駐屯しているお寺を「何者か」が銃撃した、というニュース。とある軍関係者の結婚式に届いた小包が爆発して新婦が亡くなった、という衝撃的なニュースもあった。

公共施設が狙われやすく、国軍側の警戒度が上がっている様子を見れば、これは市民側の反撃では・・・と思ってしまうのだが、ミャンマー人に「軍へのリベンジ？」と聞くと、みんな一様に「わからない」という。「すべては軍による自作自演だ」と断言する人もいて、真実は闇の中。

27 日には、複数の友人からこんな話を聞いた。「NUG が、ついに PDF に、軍への反撃を呼びかけたらしい。６月６日に全国の PDF が一斉蜂起するっていう噂だよ」

６月６日、というのは、ミャンマー人が重視する「ゾロ目の日」で、そこそこの真実味を感じる日取りだ。その反撃の日への準備なのか、NUG の副大統領や閣僚から「これからの２週間で、食料などを備蓄しておくように」という通達も出たという。

同僚は「あぁ、買い出しに行かなきゃ。でも現金がないから、誰かに借りなきゃ」と電話をかける。１万円ほど借りる算段がついたらしく、よかった、と胸をなで下ろす。

別の友人は困惑した表情で、こんなことをつぶやいた。「国軍に反撃するって言っても、何が起きるのかよくわからないのよ。今までそんな経験したことないし、いったい何をどう警戒したらいいんだろう」

・・・ただ、この PDF の反撃作戦については、メディアでも取り上げられず、あまり話題になっている様子もない。おかしいな、ガセネタじゃないかな、と思って友人に確認すると「あまり騒ぐと軍の警戒度が上がるから、水面下でやってるのかも」と言われたりして、本当のところはよくわからない。それでも、複数のミャンマー人から「６月は何か起きる」と言われるので、何かは起きるのかもしれない。（注２）

クーデターで拘束をまぬがれたＮＬＤ議員らが２月に結成した連邦議会代表委員会（CRPH）の公式 Facebook ページには、５月 28 日、ある少数民族武装組織で行われた PDF の軍事訓練の修了式をおさめた動画がアップされた。たった３日で、実に 43 万件の「いいね」を集め、11 万件もシェアされている。コメント欄には「PDF はすべてのミャンマー人の希望」「PDF の兄弟たちを誇りに思う」など、応援や期待のコメントがずらりと並ぶ。

個人的な感情としては、市民が武装化していく、というのは、そこだけを取り上げれば決して喜ばし

いことではない。40 万人もの兵力をもつとされる国の正規軍への反撃が、さらなる悲劇を招くのではないか、という不安もある。

でも 2 月 1 日以降、市民は必死で非暴力の抗議活動を続けてきた。それを軍はあまりに非道な殺戮をもって弾圧した。そして国際社会は、口先で批判するばかりで何ら有効な手立てを打てなかった。そのことを顧みずに「これからも非暴力でがんばって！」というのは、あまりに酷だと思う。

ある友人は「６月で、今度こそひっくり返すぞ」と笑顔を見せた。軍政下で不自由な青春時代を送った、二児の父親だ。「そうだね、ひっくり返さないとね」。曖昧に笑い返しながら、そう答えることしかできなかった。

突然奪われた民主主義や人権、自由を取り戻すために、いったいどんな戦略が本当に有効なのだろう。武力での抵抗以外に、まだ手段はあるのだろうか。

＜注＞

１・ミャンマー正月の 2021 年 4 月 16 日に連邦議会代表委員会（CRPH）が樹立した、民主派の政府。これによりミャンマーは、国軍によるクーデター政府と民主派の亡命政府 NUG の二重政府状態になった。軍は、NUG の閣僚 26 人を反逆罪で指名手配しており、メンバーは潜伏・逃亡しながらオンラインで活動を続けている。アウンサンスーチー国家顧問とウィンミン大統領がトップだが、拘束中のため、副大統領ドゥーワラシラ氏が実質的なトップ。閣僚は、クーデター前の選挙で当選した議員や少数民族組織の代表らの他、若き人権活動家や LGBTQ など多様性あふれる顔ぶれだ。ミャンマーの正当な政府として諸外国に承認されるべく外交活動を行い、日本を含む 7 カ国に代表事務所を置いている（2022 年 8 月時点）。

２・結局 6 月 6 日もそれ以降も「一斉蜂起」と言えるような事態は起こらなかった。こうした噂はこの時期とても多く、人々は期待したり失望したりしながら日々を暮らしていた。